

## 一九六二年歴史学研究会大会

安岡 重明

本年度の歴史学研究会大会は、五月十九日（土）、五月二十日（日）の二日間、法政大学において開催された。こんどの大会は、共同研究のあらたな出発のために、歴史研究の当面する課題を、部会方式でとりあげた。そのテーマはつぎのとおりであった。

- (A) 律令制の再検討
  - (B) 領主制の諸段階
  - (C) 幕藩制の構造的特質
  - (D) 資本主義の確立
  - (E) 帝国主義世界体制の構造
  - (F) 戦後史の時期区分
- 報告は十九日午後、第一から第六会場までにわかれて行われ、討論は翌二十日午前九時から午後一時まで、つぎの四会場にわかれて行われた。
- (A)、(B)、(C)は同じテーマ  
(G)「帝国主義」の理解をめぐる

私の参加したのは、「幕藩制の構造的特質」の部会であった。この部会は、つぎの諸報告からなっていた。

前期 研究会報告 幕藩制をめぐる諸問題 伊藤 忠士  
個別報告 第一段階から第二段階への移行について 高木 昭作  
——会津藩を例として——

中期 研究会報告 江戸中期における幕藩制の諸問題

長倉 保

個別報告 江戸中期における大阪市場の構造

安岡 重明

後期 研究会報告 幕藩制の諸段階と江戸地廻り経済

児玉彰三郎

個別報告 南関東畑作地帯における在方商人の成長

伊藤 好一

報告司会 佐々木潤之介、脇田修

討論議長 山口啓二、山崎隆三、北島正元

「幕藩制の構造的特質」というテーマは、「幕藩体制の諸段階における構造的特質、及び矛盾の存在を確定し、そのうえで移行過程の問題を考える事によって、ダイナミックな歴史の総体としての幕藩制の特質を把握せんとする」(歴史学研究二六〇号一頁)考案の上に選定されたものである。これは、江戸時代が資本主義社会成立の前史としてのみ、問題にされがちであった傾向に対して、時代特有の社会構造をあきらかにすることによ

り日本社会個有の發展法則をつかみだそうとすることみにつながつている。

諸報告は、右の問題をあきらかにするための素材を提供する意味でもつてなされたのではあるが、佐々木潤之介氏などが提起された体系に密接しすぎるか、あるいは逆の場合には充分理論化されないうらみがあつたように思う。これには、報告者の側に責任の一半があつたことは重々であるが、基本的には、やはりテーマの観点に関して議論および研究がまだ充分熟していないという学界の事情によるものである。

今年度の大会で注目されたのは、各地の研究者をひろく組織しつつ、テーマととりくもうとしたことである。近世史の場合、昨年十二月号の会誌で「幕藩体制の諸段階」の特集をおこない、今年四・五月号で他の部会とともに大会準備の特集をおこなった。こうした努力の積みかさねは、今後学会のとりべき方向であるから、こうした手数のかかることをやりとげた委員会の努力を大いに多としなければならぬ。今年度は充分成果があつたとはいいがたいようであるが、こうした努力の継続はかならずやみのり多き成果を生むだろう。